

城取博幸の

松山、宇和島のスーパーマーケット見聞録

NO151

2023年2月

城取フードサービス研究所

城取 博幸

宇和島城と城山郷土館

2023-02-12 07:04:46

市内から宇和島城へ

歩いてみたい距離はないがタクシーで向かう



1595年「藤堂高虎」が宇和島城七万石に封ぜられ板島城(宇和島城)を築城

藤堂高虎は「加藤清正」にも劣らぬ城造りの名手

「大洲(おおず)城」「今治城」も手掛けている

1608年、伊勢の津に転封

1615年、伊達政宗の長男「秀宗」入城

明治を迎えるまで約260年仙台、宇和島両国9代続く

秀宗は豊臣秀吉の人質であったことから仙台に戻ることは許されなかった

政宗が家康に願い出て宇和島の藩主となる



左は石段コース、右はフラット舗装コース



階段コース 小雨の中歩く ここを登らないと意味がない



雨が降り登りづらい道

城に向かう階段はわざと登りにくく作られている



井戸跡

ここには矢倉があった

宇和島城は「櫓」ではなく「矢倉」と表記している



虎口が見えてくる



天守の石垣



時代によって右と左の石垣の積み方が違う
左側は伊達時代、右が藤堂時代か



天守が見えてきた



本丸に向かう階段



継ぎ足された石垣跡



これが藤堂高虎の宇和島城
伊達時代に改装工事はされているが
海側から見える天守



本丸跡



天守正面の景色

宇和島の港にイギリス公使「ハリー・パークス」「アーネスト・サトウ」、シーボルトの子供「アレクサンダー・フォン・シーボルト」、同じくシーボルトの子供「楠本イネ」その子「高子」、「西郷隆盛」などが船で上陸していた 当時、イギリス船の入港がされてたのは「鹿児島」と「宇和島」だけ
宇和島は国際都市であった



正面左側 破風は2個



城下町



裏側 こも破風は 2 個



山の向こうは土佐



右側 こちらは破風 3 個
なぜ 3 個かは分からない



よく見えないが城下町か
高虎の城は3つ見たが、どこもバランスがいい



上に伊達政宗が好んだ「九曜紋」
その下の竹やぶとすずめ、その下が伊達家の家紋



城内の展示物



レプリカ

高虎の時代は五角形であったという



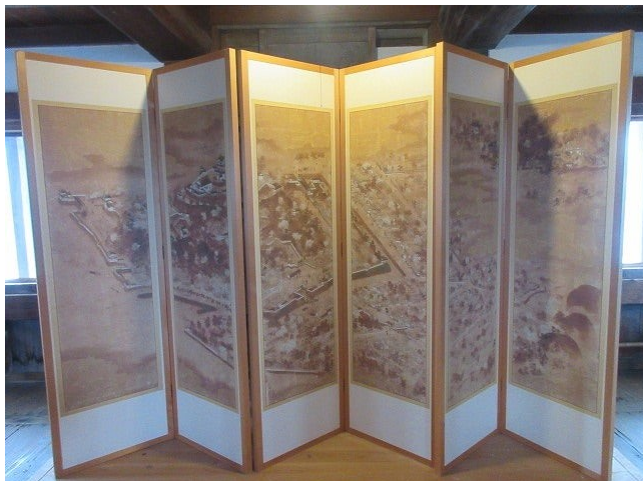
伊達家の具足



天守閣の急な階段



宇和島城が描かれた屏風



左下の白い建物が「伊達博物館」、右上の黄色い部分が「天赦園(てんしゃくえん)」



アンバランスな入口

前からなぜ入口が真ん中になのか気になっていた



階段の正面



その裏側 城の受付、郷土館のスタッフに聞いても分からない

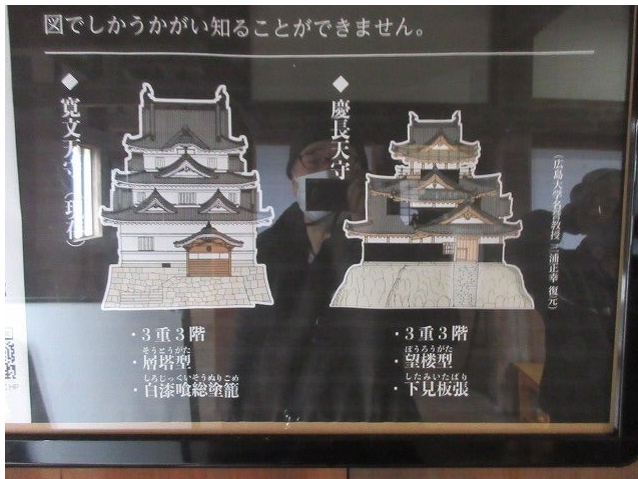


藤堂高虎の時代は



右が藤堂、左が伊達の改装 どちらも入口は右側

藤堂時代は階段は入口に向かいまっすぐだが、伊達の時代は左側に変更
 どうも、階段を登る敵に攻撃できる構造ではないかと推測する



下台所のあった場所 伊達時代は平和であったため、ここで料理をつくり城で宴会を催していたと
 いう



これは樁



花がこのように散る



城山郷土館
ここも寄った方がいい



入口



港の写真



伊達宗城(だてむねなり)

宗城は 1818 年江戸の旗本「山口直勝」の次男として生まれる
宇和島藩主「伊達宗紀(むねただ)」の養子となる

福井の「松平春嶽」、土佐の「山内容堂」、薩摩の「島津久光」と共に
「幕末の四賢侯(よんけんこう)」の一人となる



前原功山(こうざん)

日本人の手になる蒸気船の建造に成功



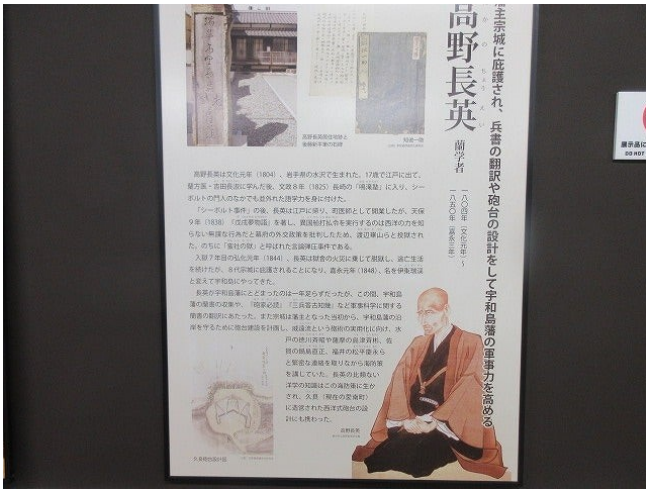
大村益次郎 戊辰戦争を勝利に導いた軍官の総司令官

科学的、合理的頭脳で兵制を近代化

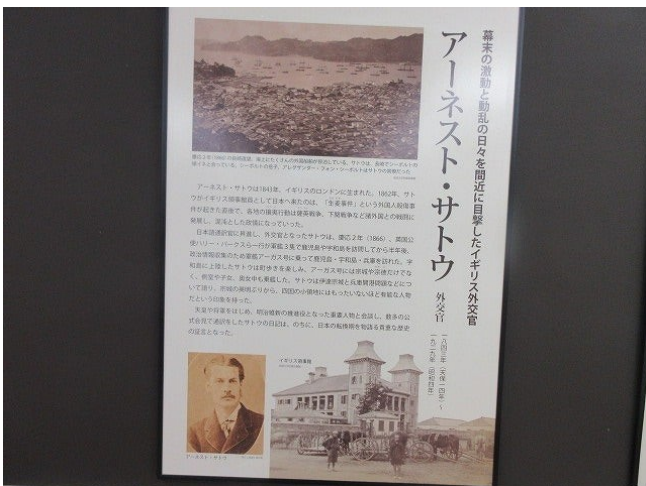


高野長英(ちやうえい)

医者、蘭学者



アーネスト・サトウ イギリスの外交官 軍艦アーガス号に乗って鹿児島、宇和島、兵庫を訪れた明治維新の重要人物



榎本イネ シーボルトの娘(長崎の遊女の子)で、日本初の西洋医学による産科女医



シーボルトの子

アレクサンダー・シーボルトはパリ万博の江戸幕府通訳として徳川昭武と共にパリに滞在
幕府の情報は薩摩に筒抜けであったとドラマ「青天を衝け」では語られている
中央が「徳川昭武」、左上が「渋沢栄一」、その下の横を向いている男が「アレクサンダー・シーボルト」だ



三瀬諸淵と高子

諸淵はシーボルト最後の門人で語学の天才
維新後は医学面に尽力したが、1877年 39歳で急死
高子はシーボルトの孫娘
母の榎本イネと共に医学の修行を行う

シーボルト最後の門人となった語学の天才、維新後は医学面に尽力

三瀬諸淵 高子

蘭学者 医師 一八三五年 生誕（岡山）
一八五五年 留米（オハイオ）
一八七七年 帰国（岡山）
一八七九年 留米（オハイオ）
一八八五年 留米（オハイオ）

三瀬諸淵は天保10年（1839）、大洲の塩田屋に生まれた。母がシーボルトの弟子・二宮敬作の娘にあたることから、敬作に師事し、榎本イネとともに医学の修行をした。安政3年（1856）、敬作がイネとともに幕府に帰ると、諸淵も同行。オランダ通詞からオランダ語を学んで、かなり上達した3年後、シーボルトが再び日本へやってきた。

文久元年（1861）、幕府から外交顧問として招かれたシーボルトに随行し、幕府滞在との通訳をした諸淵は、幕府のシーボルト解任にともなって帰郷を約束され、鹿児島へ送られた。

元治元年（1864）に出発すると、薩摩藩の藩邸に滞在し、翌の2年（1866）イネの嫁・高子と結婚。イネと江戸幕府の間に生まれた高子は多病で育たず、14歳のときイネとともに江戸幕府に来て半松屋の養女となった。この年、諸淵は「英蘭学種古西」の教授となり、イネリヌの養女が半松屋へ入籍してきたときも通訳をし、天才的な語学力は凡に足らされた。

維新後は、徳島藩の命により、オランダ医術師ドワイエンらと英蘭劇院に尽力。自らの幕中生涯の経緯から医術の改革にも努めた。文部省奉命兼中大阪病院一等医を兼ね、明治10年（1877）参府により、39歳の若さで亡くなっている。

三瀬諸淵、明治4年、三瀬高子

穂積陳重（法学者）と渋沢栄一の長女「歌子」の結婚



家系図 洪沢栄一の子「歌子」と「穂積陳重」



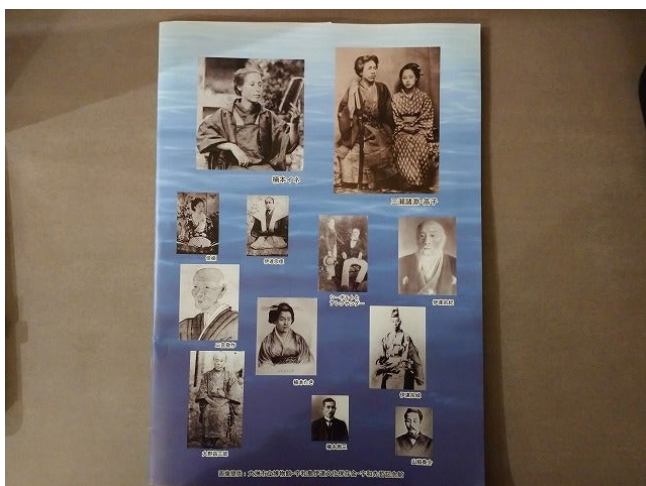
「生きてるだけで丸儲け」はこの人が最初に言った言葉
明石家さんま氏ではない 油屋熊八 1863年～1935年 別府温泉の観光開発



マンガ「幕末の美少女高子」～宇和島の日々～



榎本イネ(シーボルトの子)、三瀬諸淵と高子



この漫画によると、イネの子高子は 1879 年「周三」という男の子を出産

周三は目が青く、髪の毛は赤だったという(写真参考)

犯人はアーネストかアレキサンダーかそれともハインリッヒか

女性の地位が低くドロドロとした時代であった

周三は叔母のイネ(シーボルトの子)が引き取り、高子はその後医師「山脇泰介」と結婚している

マンガの最後のページにこんな一枚が

こんなことがあるんだと驚く

松本零士が「銀河鉄道999」を発表が 1977 年

1990 年代に大洲で高子の写真を初めて見て愕然とする

零士が描いたメーテルのイメージと全く同じであったからだ

松本零士の先祖は大洲出身

高子が亡くなった年に零士が生まれている

下手な解説より、興味のある方は拡大して原文をお読みください



おもしろいですね 穂積家があった場所

手前の橋は「穂積橋」



石碑



今は「ほづみ亭」になっている
早く分かれば行ったのだが



今回は「伊達博物館」「天赦園(てんしゃくえん)」「道の駅」「明治の砲台」を紹介します

宇和島観光の続き

宇和島伊達博物館

1615年、伊達初代藩主「秀宗」が入国

八代藩主「宗城」まで約250年の貴重な文化財が残されている

休館日が月曜日から火曜日に変更になっているので注意



博物館の前の道路に 今は松と柳だけが



「宗城(むねなり)」と「西郷隆盛会見の場」 1867年西郷は船で宇和島に到着
1868年に戊辰戦争勃発

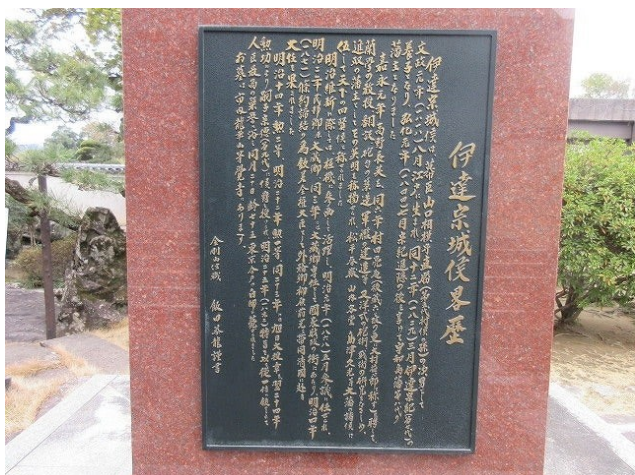


伊達宗城公銅像



説明文

幕末には(後に代は変わるが)、松平慶永(福井)、山内豊信(土佐)、島津斉彬(鹿児島)と共に活躍



写真はここまで 写真撮影は禁止 展示物はイギリス駐日行使「ハリー・パークス」が「伊達宗城」に宛てた漢字の手紙も展示されている



パンフレット

秀宗の父政宗からの手紙や政宗ゆかりの品々が展示されている



「天赦(しゃ)園」

近くに庭園へ歩いて向かう

二代藩主「伊達宗利」が 1672 年に海を埋め立て隠居のために造成

語源は政宗が隠居する時家臣に示した「醉余口号」の中から

「馬上に少年過ごし 世は平らにして白髪多し 残軀(ざんく)は天に赦(しゃ)するところ

楽しまずして是(これ)を如何(いかに)にせん」

*「若いころは馬上で戦った 世の中が平和になり白髪になる

天に残す命を許され、楽しまずにはいられない」

と言う意味から「天赦園」と名付けた

休館日は月曜日 月曜、火曜日は博物館と天赦園の両方を見学できないから注意



休館日であった



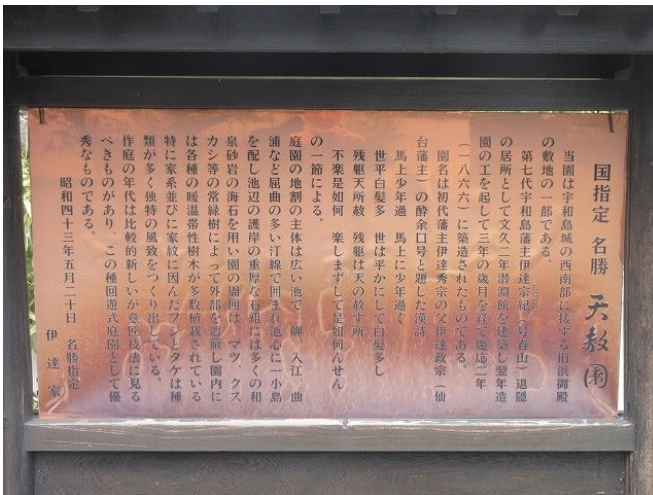
パンフレット



案内図



ここまでで終わりだが



実は月曜日は閉館していたが、たまたま管理の方がいて特別に中を案内してくれた
わざわざ私のために案内していただきありがとうございました



伊達家の家紋は「竹に雀」



奥は茶室



茶室 昭和天皇が皇太子の時、ここを訪れた



これが有名な藤棚

藤原鎌足を祖に仰ぐ伊達家は園内に6基の藤棚がある
藤の花は上に伸びる「上り藤」にされている



その端に蘇鉄(そてつ)の木



春雨亭は宗紀の書屋

左側の戸を開ければ、藤棚が太鼓橋のように見える

さらにその奥に極楽に通じるという蘇鉄(そてつ)が見えるように設計されている

説明を聞かないと分からないこと



ここは鴨猟の時鴨を飼っておく場所
よく見ないと分からない



山も庭園の一部
建築物は一切見えない



亀石



奥の建物は現在料亭になっている



宇和島城が見える



宇和島城から伊達博物館、天赦園を見る



案内に感謝して深くお辞儀をする
寄付を申し出たが一切受け取らなかった

天赦園を後にして港に向かう
四万十市まで87kmだ



きさいや広場



道の駅だ



入口で

疑問に思っていたことが分かる

手前は仏教に使われる「榊(しきみ)」

奥の背に高い植物が神道の「榊(さかき)」だ

4対1くらいの差がありしみの売場が圧倒的に広い

精進料理に使われる食材の品揃えが多い理由が分かった

榊(しきみ)と榊(さかき)の見分け方は

榊の葉は手の平のように横に伸びているのに対し、榊は一枚一枚上に伸びている



店内



生産者の惣菜 野菜や魚も豊富だ



お腹が空いたのでレストランへ



メは鯛めし 手前の男性の顔が白々しい



海鮮丼とわかめうどんを注文 寒い中、冷たい海鮮丼だけでは辛いため、ハーフサイズのうどんも一緒に



漬物の器に麦みそがついている



キレイな盛り付けだ



甘い醤油をかける 甘い醤油は刺身によく合う 最近では自宅でも甘い刺身醤油を使っている



うどんもアツアツ

九州、四国でよく使われる「桜かまぼこ」

体力回復



これが食べたかった「太刀魚の巻焼」 竹の棒に開いた太刀魚をぐるぐる巻いて焼いたもの
私は「太刀魚ぐるぐる」と名付けた



専門店はあるというが、ここは冷凍食品しかない 残念



凄い商品を発見



7種類のスライスされた柑橘類の乾燥

砂糖は使われていないため、自然の甘さが残る

箱入りでないと移動の途中に割れてしまうから箱入りが欲しい

嚴重に包装してくれたことに感謝



さらに歩いて「歴史資料館」へ

頻繁に来られる場所ではないのでつい欲張ってしまう

足はパンパン

目的地に着くと閉館中であった

建物は旧宇和島警察署



本当の目的はここ



市指定史跡「樺崎砲台跡」



幕末に宗城は攘夷体制を固めるため「高島秀帆」の弟子に砲術を学び、オランダ流砲術を藩内に定着させた

1855年に砲台が完成 1866年6月英国公使パークスの来訪に際し礼砲を打っている
 イギリスからの武器購入の打ち合わせか
 場合によっては本家の仙台伊達家と戦うこともあるので宗城の心境は複雑であったと思う
 仙台伊達家は列藩連盟には入っていたが戦わずして降伏した
 高島秀帆は西洋砲術家で、門下に「佐久間象山(信濃)」「橋本左内(福井)」「桂小五郎(長州)」
 らがいる



石垣の上が「砲座」、海に向けられているのが「方眼」
 上に登ることができる



外は堀になっている



火薬庫跡



雨の中よく歩いた

タクシーを呼び宇和島駅に向かい、あんぱんまん電車で松山へ
宇和島一泊二日の旅は終わり



途中のこの城は？

見なくてもよいものを見てしまった

これは「大洲城(おおずじょう)」

藤堂高虎の城だ

また戻って見ないといけないな



松山の東急 REI ホテルからの景色

アーケードの入口に「大街道(おおかいどう)」と書かれている

ここを進むと鍋焼うどんで有名な「アサヒ」と「ことり」がある



ホテルのすぐ脇は「松山城」へ向かう道

松山城は前に訪れた



次回は、目的であった山頭火が亡くなった場所「一草庵」と「道後温泉」を紹介します
ブログを書くのに時間がかかるためゆっくりと